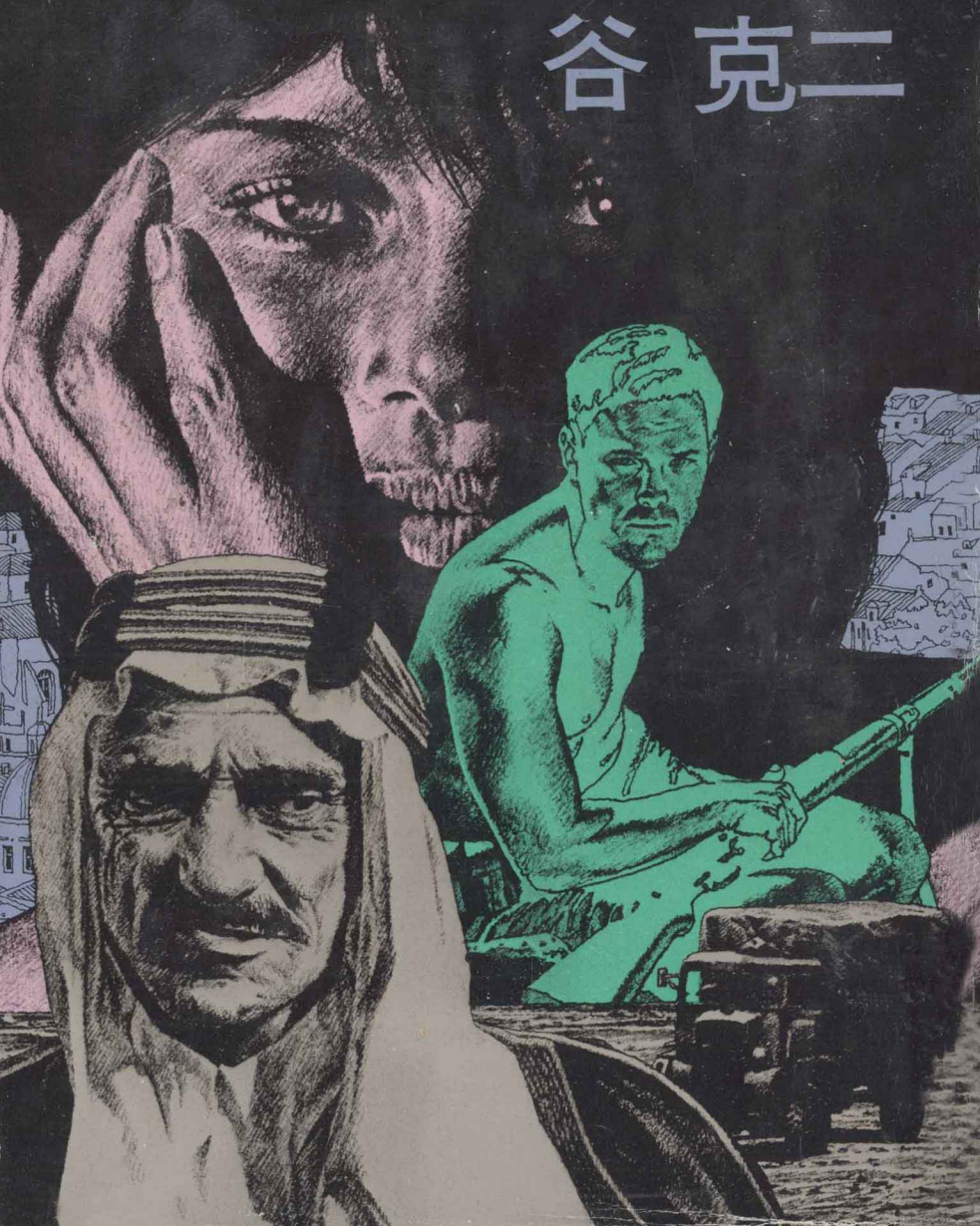


地中海の真珠

谷 克二



地中海の真珠

谷克二



角川書店

地中海の真珠

谷 克 二

昭和54年 2月28日 初版発行

発行者 角 川 春 樹

印刷所 東洋印刷株式会社

製本所 株式会社 鈴木製本所



発行所 株式会社 角川書店

東京都千代田区富士見2-13 ㊟ 102
TEL03(265)7111 <大代表>㊟3-195208

Printed in Japan
© Katsuji Tani 1979

落丁・乱丁本はお取替えいたします
0093-872240-0946(0)

☆目次

地中海の真珠——三

アレンビーの橋——三元

アイリーン——七三

バギオの月——一四三

サンバギータの花飾り——一八五

★初出誌一覧——三元

イラストレーション 日暮修一

デザイン 鈴木邦治

地中海の真珠

ベイルートは、地中海の真珠と呼ばれる。青い光をたたえる地中海にそって立ち並ぶ高層建築は雪をいたたくレバノン山脈と美しい調和を見せ、世界中から訪れる観光客を魅惑する。

この地にイスラム教徒とキリスト教徒の対立に端を発した内戦が火を吹いたのは、一九七五年のことである。アラブ諸国の思惑、イスラエルの中東戦略が複雑に絡みあい、内戦は混乱を極め、十九か月間続いた。

以下は、戦乱終結直後の一九七六年十一月のことである。

——町中がまるで蜂の巣だ。

ベイルートの市内に入った途端に、私はそう思った。建物の壁面は、いたるところ銃創が走り、一〇一ミリ無反動砲をうちこまれた建物は、こぶしで襖をなぐりつけたあのような穴があいている。骨組みだけになった建物では、へし曲った鉄骨が赤く錆びついている。先端に、コンクリートの塊がぶらさがっているものもある。

道路には粉々になったガラスやコンクリートの破片がちらばり、そのうえを紙くずが海から吹きよせる風になぶられて舞っている。路面にあいた大穴には、ひび割れのような亀裂が走っていた。対戦車用地雷のあとだろうか。迫撃砲弾が炸裂したあとなのだろうか。地表をえぐるようにしてあいた穴はあちこちにあり、前日までの雨で水溜りになって、青空がまだ

らに映っていた。

十一月二十六日、私はベイルートにむかっていた。ドイツで停戦のニュースを受けたのが、二十五日の早朝のことであった。電話で知らせてくれたのは、ハンブルグ^{ハンブルグ・ヴァイトウング}新聞社の記者で、友人のコッホだった。

「ベイルートで停戦の話しあいが始まりましたらしいぜ！」

「大丈夫かよ。一週間ほど前もそういったニュースが流れ、その翌日にはシリア軍が攻撃を再開したじゃないか」

「アラブだよ、相手は。彼等には『あやふやな停戦』か『こわれやすい平和』しかないのさ。でもな、今度はかなり確率が高いらしい。ベイルート空港も再開されるそうだ」

「今、か？」

「いや、そいつはもう少し先のことだろうよ」

「今日何時だ？」

「朝の五時だ」

「飛行機の手配をたのむ、ダマスカスに飛ぶ。すぐに出発の準備をする」

正午ジャストにハンブルグ空港をルフトハンザ機で飛びたつと、シリアの首都ダマスカスには十九時三十分に到着する。一時間の時差をさしひいて、正味六時間半のフライトだった。ダマスカスには霧雨が降っていた。気温がさがって肌寒いほどだった。照明の少ない陰鬱な空港では、暗がりの中を頭布^{カフエ}をまぎつけた男たちが動き廻っていた。

ターミナル・ビルディングに入った。油を煮たあのような、強い刺激臭が鼻腔に流れこんできた。

——アラブの世界に入りこんだのだ。

臭いはそれを明白に伝えてきた。

シリアの空港警備員は、大柄で黒いちれ毛の男だった。アラブ人らしい、一刀彫のような鋭い眼付きをしていた。カーキ色のシャツを着て、そのうえに同じ色のセーターを着込んでいた。丁重ではあるが、パスポートと荷物の検査は厳重をきわめた。カメラはセルフタイマーをかけて、シャッターが本当に作動するかどうかを調べた。カメラの中に、時限爆弾が組みこまれていないかどうか調べるのだ、というのはあとで知った。トランジスタ・ラジオはスイッチを入れてみたあと、カセットが動くか試してみた。取材用の筆記用具なども、一つ一つ手にとって確認をして、もとにもどした。三冊ほどもっていた本も、必ずひらいてみた。ボディ・チェックはもちろんおこなわれた。検査が終り空港をでたとき、私の時計は十時半をまわっていた。ホテルに着いたのは、十一時すぎだった。

翌日の午前中は、タクシーをチャーターすることに費した。昼近くなって、やっとベイルートにいてもいいという運転手がみつかった。

「片道三〇〇シリアン・ポンド(二、五〇〇円)なら」

陽焼けした顔に深い皺をきざみました初老の運転手はいった。呟くような物言いだった。ダマスカスからベイルートまでは、平和時なら三時間たらずで到着できる距離だ。男のいったタクシー料金は、普通なら往復の料金だった。

「わかった」と私はいった。「ただし条件がある。三日後にむかえにくること。五〇〇ポンドだす」

男は、しばらく考えていた。背はそれほど高くなく、がっしりとした肩に首がのめりこむように坐っている。考えている間、鳶色の眼がなにかを見詰めているように焦点が定まって動かない。

——この男なら信用できるな、と私は思った。

「六〇〇ほしい」と男はいった。「そのかわり、ペイルートでは二〇〇渡してくれればいい。残りはむかえにいったときにもらえれば、それでいい」

私は了解した。手を差し出して握手をした。男の指は、節くれだって固かった。

男は、自分の名前はモーゼスだ、といった。

「モーゼス……？ あの聖書にでてくるモーゼスと同じかい？」というのと、「そうだ。だけど、俺はイスラム教徒だよ」とつけ加え、すこし口もとをほころばした。

ビニールの容器に入った飲料水と罐づめを買いきんで、ダマスカスを出発した。標高一〇〇〇メートルのシリア台地は、なだらかな上り勾配でアンチ・レバノン山脈につづいている。高度があがるにつれて、茶褐色の台地がひろがっていった。一週間降りつづいた雨を吸って、土の色が黒ずんでいる。道路は泥川のような。車は高い飛沫をたてながら走る。すれちがうどの車をみても、まるで黄色いペンキをぶちまけたように、泥をかぶっている。

アンチ・レバノン山脈の背をこすと、高原地帯がひらけてきた。遠くにレバノン山脈の高い連なりが見えてきた。新雪に覆われて、ぬけるような青空に鮮明な輪郭を刻みこんでいる。

「ここから、どのくらいでベイルートにいけるのかね」と私は訊ねた。

「さあ」とモーゼスは首をかしげた。「なにせ、シリア軍はまだ展開しているからね。チエック・ポイントがどうなっているか……。それ次第で決まるだろう」それだけいうと、モーゼスはまた黙りこくってしまった。シリア人の彼にも、詳細な事情はわかっていないのかも知れない。

シリア・レバノンの国境が近くなるにつれて、カーキ色の軍服をつけ、自動小銃を肩からつるしたシリア軍正規兵の姿が多くなった。山腹には迷彩をほどこされたトラックや給水車が、数十台単位でとまっている。白いテントがいくつも盛りあがっているのは、物資の補給地点らしい。兵隊が、二キロほどの間隔で立哨している。

国境にあるイジュディティの検問所を通過した。車と荷物は調べられたが、手続きは予想していたほどむつかしくはなく、いかめしい顔をした係員はしごくあっさりとしりあの出国スタンプを押してくれた。検査をうける人数も少なかった。

レバノン側の検問所にも、シリア軍の兵士がいた。車が止められて、赤い肩章をまきつけた憲兵が、モーゼスに書類の提出を求めた。書類に眼を通しながら、ときどき私の顔に視線を走らせるのがわかる。無関心をよそおって、煙草を喫っていた。憲兵は書類をかえし、車は走りだした。

国境からベイルート市内までは、六〇キロ余の距離である。その間、四キロおきにチエック・ポイントがあった。そのたびに車が止められ、眼付きの鋭い兵士がドアをあけて中をのぞきこむ。なにもされない、とわかっていても気持ちのいいものではない。検問を通過するた

びに、ノートに時間とメモを書きつけていつてみた。

——二時二十分。シリア側検問所通過。破壊された乗用車が道路のわきにほうりだされている。戦車かブルドーザーでおしつぶしたらしく、フロアーだけがなんとか原形をとどめているだけだ。道の両側には迎撃用の戦車が埋めこまれ、砲塔だけを地表に出している。砲身を高く空にむけてつきあげている。

——二時五十分、レバノン側検問所を通過、レバノン領に入った途端、検問が厳しくなる。ベイルートにむかう車が少ないため渋滞はおこらないが、それでも一台の検査の時間が長いので、かなりロスの時間がでる。憲兵からパスポートの提示を要求される。職業欄に「書き手(WRITER)」とあるのをみて、ジャーナリストか、とたずねる。いや、たんなる書き手だよ、と答えると、しばらく私の顔に視線を固定していたが、詳しく職業をききたい、といい下車を命じた。

道路のわきにある野戦用テントの中につれていかれる。中には士官らしい男が二人いた。かなり流暢に英語をしゃべる。コッホの言葉を想いだす。

「いいか。ジャーナリストというと、行動に制限がかかるおそれがある。不利なことを書かれるのを嫌うからね。憲兵がくつついて歩くくらいのは覚悟せにゃあならん。自由にうろつき廻って取材するためには、フリーランサーで通した方がいい」

結局、フリーランサーの物書きだ、ということを押しきった。OKがでて検問を出発したのが三時十五分。

——三時三十分。次の検問にひっかかる。突撃用ライフルアサルトをもった兵士が、自動車を両側

からはさみこむようにして囲み、チェックをする。

——三時五十分。四番目の検問……。

このあとは、ペイルート市内に入るまでに二、三十分おきに、合計二十四回の検問をくぐらねばならなかった。

戦闘の最初の痕跡をみたのは、レバノン山脈の峠をこえた時であった。峠に石で造られた頑丈な建物があった。威嚇射撃をくわえたらしく、屋根の一部がきれいにえぐられて吹きとんでいた。しかし、戦いの名残りをとどめるものはそれだけであった。

峠をこえてレバノン山脈が下り勾配になると、戦闘がどのような経過をたどったかはつきりとわかる。

レバノン山脈は、深く切れこんだ峡谷の多いかなり峻嶒な山系で、道路は急な勾配をとりながら羊の腸のように曲りくねっている。その曲り角ごとが戦場だったのだろう。道に沿って立ち並んでいる家々のガラスは吹きとんでしまい、一階におろされているシャッターは、弾痕で虫喰いのあとのようになっている。古いものは、穴の周囲が赤く錆びはじめている。ブラインドが干切れてぶらさがり、山風に乾いた音をたててゆれていた。

曲り角ごとにシリア軍の中型戦車が配置されていた。砲塔には重機関銃手が射撃体勢のまま坐っている。黒いベレーをかぶり、肌に切りこむような山風の中で石像のように微動だにしない。銃口は道路にむけられている。車は着弾線上を横切るようにして走っていく。ダマスカスのホテルを出るときの、ボーイとの会話がふと頭の中にうかんだ。

「どこにいくのか？」

「ベイルートだ」

オーといって、ボーイは両手をひろげ、上体をことさらに反らしてみせた。

「グッド・ラック！（幸運を！）」

——なんとまあ、仰々しい。

そうとしか思われなかったボーイの言葉が、こうした状況に巻きこまれていくと、次第に現実味を帯びてくる。

——本当に幸運が必要なのかも知れないな、と私は思った。

陽がかけれるところに、車はベイルートの市街区に入った。廃墟の中を通りぬけて、海に面したミナートルホルン通りに出た。モーゼスとの約束はここまでであった。私は荷物をもって車を降した。モーゼスは二〇〇シリアン・ポンドの金を受けとると、車を大きくＵターンさせた。そして、窓から顔をのぞかせて、一語切るようにいった。

「アッサラーム！」

いいおわるとすぐに、モーゼスは車をダッシュさせた。車はみるみるうちにシリアの方角にむかって走り去っていった。

アッサラーム……。直訳をすれば「汝が身に平和あれ！」という意味だ。普段は「こんにちは」とか「さようなら」の意味しかもない言葉だが、このときは、もとの言葉の意味が痛いほどに伝わってきた。

私は、破壊されつくした町の通りに一人でとりのこされ、たたずんでいた。薄闇の中を潮

の香が流れた。波の音が聞えた。

——モーセスは、三日後にむかえにくる、と約束したが、本当に来てくれるのだろうか？ふと、そんな不安が胸の中に湧きあがってきた。そう思った途端、急にわめき出したくなるような孤独を、私は感じた。

二日間、私はベイルートの町を歩き廻った。町には異臭が漂っていた。それは決して死体の腐っていく臭いとか、人間の排泄物が分解していく腐敗臭といった具体的なものではなく、どのような破壊のあとにも〈残り香〉のように流れている、破壊された物質から滲みでてくる体液といったようなものであった。

海岸側はサウジアラビアの軍隊によって管理されていた。シリア軍はベイルート市の西側地区三分の二、つまりベイルートの市街区からレバノン山脈にかけての全地域を軍管轄下に置いていた。クエートの軍隊も『平和維持軍』という衣をまといレバノンに入ってきていたが、イスラエル国境におしつけられたパレスチナ人や左派の勢力を監視するために南部郊外に展開していた。クエート兵の姿を、市内でみかけることはなかった。

コントロールの厳しさは、やはりシリア軍管区が群をぬいていた。四か月の実戦闘をへてきているだけに、パトロールをする小部隊の動きにも無駄がなく、軍装も実用一点ばりの野戦装備で、多分に儀仗兵的な軍服に身を固めているサウジアラビア軍とは、数段の違いがあった。配置についているシリア軍兵士たちも、頬がそげおち緊張しきった顔をしていた。

市内の各所では今だに（十一月二十七日現在）単発的な戦闘が発生している。停戦命令がで

ているのに、と考えるかも知れないが内戦は十九か月も続いたのだ。その間に蓄積された相互不信感や憎悪の感情は一朝にして拭い去れるものではない。「はい、今日から停戦です。平和になったのだから射ちあいは止めましょう」といわれたとしても、破裂するまでにふくれあがった敵愾心は霧がはれるように消えるものではないだろう。むしろ、どこかでだれかが彼だけの戦闘を継続している、と考える方が、私には自然なように思える。

戦争は、生き残ったものたちに最も残酷な傷跡を残す。それは、ペイルートでも例外ではなかった。

たしかに、目抜き通りのハムラ通りには闇市がたち、屋台には食料品やウイスキー、煙草が山と積まれ、買物客があふれている。しかし、一步裏通りに入ったときに出会うレバノンの表情の暗さは、陰惨ですらある。

通りの一つを歩いているとき、一人の男が私にちかよってきた。黒いソフトをかぶりVネックのセーターを着ている。瘡せた顔の中で、眼だけがバセドウ氏病を患った人のように大きくとびだしていた。男は、私が首からさげているカメラを指さしながら言った。

「お前はジャーナリストか？」低いぐもった声だった。

「いや、違う。だがペイルートのことを書くとは思っているよ」

「俺の店の写真をとってくれないか？」

「お前の店はなにをやっているんだ？」

「御婦人がたのドレスを作っているんだ」

私は周囲を見廻した。廃墟となってしまった建物があるだけで、それらしい店などどこに